

## 山脇和泉元宜をめぐって

関 屋 俊 彦

### はじめに

狂言和泉流の宗家山脇和泉家は、伝承では坂本隠士佐々木岳楽軒を流祖として現在何世と数えるが、慶長十九年（一六一四）尾張藩に召し抱えられた元宜を以って累代で数え、実質上の初代に数えることが適当であろう。そして、その依って来る所は「和泉流狂言由緒書」と笹野堅氏が旧版『狂言集成』（春陽堂・昭和六年発行）の解説で紹介された「寛永八年口宜案」であった。笹野氏も「私は彼（筆者注、元宜）を和泉流の流祖と考えるのである」と慎重な態度で述べておられる。私は以前『藝能史研究』五十五号（昭和五十一年十月）に「和泉流家系考」と題して徳川三百年間の山脇和泉家累代を概観し、「和泉流狂言由緒書」については『武庫川国文』第十

三号（昭和五十三年三月）と同誌第十四・十五合併号（昭和五十四年三月）それぞれに蓬左文庫所蔵の水野正信「青窓漫筆」中の「狂言由緒略書」と国会図書館所蔵の小寺玉晃「連城亭隨筆」中の「和泉流狂言由緒書」を翻刻紹介した。宗家に伝わっていた「狂言由緒略書」は九代元清が明治十三年二月、東京へ移住する際に難船し、水没すると言う憂目に遭っている。しかし、流失したのではなく、後に元清自身が敷き写した模様である。好機あつてそれに接し得たが、基本的には水野正信、小寺玉晃写本と甚しく異同のあるものではない。

今回は「資勝卿記」等の確実な史料に基づき、主として初代元宜の事跡の記述を中心に、右の由緒書や口宜案の記載に若干の修正を加えた説みのあり得ることを示そうとするものである。

尚、本稿は昭和五十九年度中世文学会春季大会（於法政大学、五

月二十日)において「狂言和泉流の発生」と題して発表したものに諸先輩の御教示を得、とりまとめたものである。更に、関西大学国内研究員規定に基づく昭和五十八年度国内研究の成果の一端であることを明記する。

## 一、六条の者

『資勝卿記』は日野大納言資勝の日記である。写本として伝わっているものうち、国立公文書館蔵本・宮内庁書陵部蔵本・東大史料編纂所蔵本を確認し得た。後掲資料「山脇和泉の記録」には書写状態の良い宮内庁書陵部蔵の十三冊本を主として用いている。参照されたい。今、問題にしようとする元和八年(一六二二)十一月二十三日の記録は既に『大日本史料』第十二編に収められ披見容易である。その後半部分に着目したい。「今度六條ノ者金春ヤ太郎弟子狂言師一人来仕候也、今日ハナコヲスル也、後朝ニアサウ、尼サタ」とある。私は第一にこの「六條ノ者」を「山脇五郎左衛門元宜」と想定し、第二にその山脇元宜は金春弥太郎、つまりこの時代から言えば大蔵虎清か虎明、恐らくは十二世虎清の弟子で狂言師だと推量する。

第一の六条の者が山脇元宜であると言うことは『資勝卿記』の別

の記載から読み取ることが出来る。それは後述するように山脇元宜が寛永八年に石見守を受領することと考え合わせて、寛永九年二月十四日の「六條狂言師石見守」、寛永十年十一月の「六条ノ狂言師石見」、寛永十四年十月十六日の「六条石見」等々の記載からして六条に住む元宜と考察し得ると思う。

金春弥太郎を大蔵虎清と推量したのは、大蔵虎明の『わらんべ草』に「親驚しらねばこそ婿の仁蔵を山脇和泉方へやり、花子を習はせしと聞し也」に和泉の名が一箇所、元宜側からも「狂言六義」(天理図書館善本叢書所収)中、△夷里沙門▽△政頼▽△喝子▽△三人片輪▽の演出記載に(大蔵)弥右衛門、弥太郎の名が見えることからである。虎明は時代的には元宜と同世代で近すぎるので、虎明の父虎清を指定してみたのである。この大蔵虎清が金春弥太郎と呼ばれていても不思議はないと思う。例えば十世(虎清祖父)は金春弥太郎を名乗っている。又、『和泉流狂言由緒略書』では寛永十一年頃「京都四条坊門通、橋弁慶町」に居たように書かれているが、資料的価値から言えばやはり『資勝卿記』の記事を重くみたい。

寛永十年十月一日の条に「狂言七条石見ヤニ仕候」とあるが、この七条石見ヤとは元宜の親、つまり元光のことと思われる。元光の確実な資料がない今、貴重な資料である。

次に山脇元宜が大蔵虎清の、言い換えるなら和泉流の者が大蔵流

の弟子であつたかと言ふことであるが、あり得たことではなからうかと思う。元文三年の『猿蓑伝記』に代表される如く、和泉は流でなく派であり、脇本佐左衛門（『古之御能組』寛永二年二月二十七日の条にもその名は見える。後掲資料参看）の弟子であると言つたやや偏見に満ちた言い方であり後の成立ではあるが、そうした見方もある。しかし伝承だからと言つて簡単には片付けられない、大蔵流の方が確かに歴史的成熟度があつたであらうと認め得る点はある。勿論、大蔵流の弟子であつたとしても、和泉流の流れから考えていくなら、禁裏御用を誇りとする和泉流の独自性はこの元宜から始まつたと考えて良い。「由緒書」で初代に位置付けられるのは尤なことであつたろう。

## 二、石見守

『資勝卿記』から次に判明することは、元宜が寛永八年に石見守を受領していたことである。寛永八年十一月四日の条に「狂言師山脇五郎左衛門石見守受領勅許」とある。実際には後述するように十月の勅許で、日野資勝はそれ以前に江戸に赴いてその旅から帰つたばかりで、十一月四日に元宜石見守受領の知らせを受けたと言ふ記録である。ところで、旧版『狂言集成』で笹野堅氏の紹介された有

名な口宜案（某家所蔵）がある。「口宜案／上卿日野大納言／寛永八年十月廿四日宣旨／源元宜／宜任和泉守／藏人頭右大辨藤原經廣率」とある。そして、この口宜案こそは、禁裏での花子上演を機縁として受領の和泉守を名乗る為には大事な証拠物件であつたと思われる。しかるに『資勝卿記』では寛永八年に石見守受領である。こことはやはり『資勝卿記』の記載に信頼を置きたいところである。更に決定的なのは寛永十四年に元宜自らが石見守から和泉守に変えた旨を申し出て受理されている。即ち、十月八日の条に「石見ハ尾張大納言殿内衆指相候付て和泉と名替仕度由申候」、十月十日の条に「狂言師石見参て和泉ニ名替之義」云々とあり、十月十八日の条には「狂言師石見守寛永八年後十月——口宜案持参」云々（以上、後掲資料参看）とあることから、どうやらこの時元宜は古い寛永八年石見守口宜案を持参し、和泉守に改めたい希望を申し入れたようである。従つて『資勝卿記』によれば、寛永八年に山脇元宜は石見守となり、寛永十四年に自ら望んで和泉守を許されたと言ふことである。そして、笹野堅氏の紹介された口宜案は、初代元宜を尊崇する余り後代に製造された可能性あり得るものと言ふことも出来るであらう。又、『和泉流狂言由緒書』で、元宜の親つまり六世元光が「和泉守ニ任せられ、又石見守ニ転任す」とあるのも、疑つてかかれば受領順は逆であるけれども、その事実は元宜のことであつて、

それを元光の話に改め直したのではないかと考える。元宜の存在はそれだけ大きかったと読んでみる。

元宜が和泉守を名乗る以前の一時期、石見守を名乗っていたことが判明したことからして、『資勝卿記』で他に石見と書かれてある箇所も元宜と解して差しつかえないと思われる。後掲資料にはそれから関連性のある記事を列記した。例えば寛永十一年九月十四日の条に「三番三 五郎左衛門石見ハ寿命経劔ヲ持テ出」とある。「五郎左衛門石見」とするが、現転写本の元の本は五郎左衛門は石見にかかる注記だったのである。もし、そのまま読むとするなら「五郎左衛門と呼ばれる石見」となるであろう。ちなみに寿命経とは表章氏の御教示によると、千歳を意味するのであって、劔を持つ演出は大変珍らしいかろうと言うことである。

更に『鹿苑日録』七十の寛永十一年十二月十日の条に「折節狂言石見五郎兵衛父子来」とある（田口和夫氏、橋本朝生氏御教示）。

この「狂言石見五郎兵衛父子」も元宜・元永親子のことであると思われる。ただ五郎兵衛と名乗るのはよくわからない。これをそのまま押し広げて諸記録に五郎兵衛とあっても、それが果たして直接山脇元宜を指すかどうかは個々の問題である。例えば「古之御能組」にもその他の箇所では五郎兵衛と名乗る者もあるのだが、全く別人の清水五郎兵衛である可能性が高い。

### 三、尚嗣公記

近衛尚嗣は近衛家十九代。承応二年（一六五三）七月になくなっている。彼は「尚嗣公記」なる日記を残してくれている。私は陽明文庫蔵の転写本を名和修氏の御配慮により閲覧した。それを見ると、山脇元宜が尚嗣と大変親しく、しばしば近衛家に出入りしていることがわかった。そのことについては「武庫川国文」13号（昭和五十三年三月十五日発行）で「和泉流家系考」補遺 附資料紹介「狂言由緒略書」として既に紹介した。その要点は十九項目に及んだが、いささかの訂正を加えたい。「尚嗣公記」寛永十四年九月十五日の項に「天晴乙亥梵峯来正竹狂言石見来申之劔斗退出」とあり、「武庫川国文」13号では石見を元光のことと解していたが、『資勝卿記』の記事よりして元宜であると訂正する。又、杉山園子氏が「南山国文論集」八（昭和五十九年三月）「狂言の一系譜 野村又三郎家の成立」で「尚嗣公記」に、又三郎家の師和泉は、六代鳥飼和泉守元光がすでに寛永十年四月九日の条より登場し」とされたのは、右の寛永十四年九月を寛永十年四月九日と読み誤まれたことから生じたものであろう。「尚嗣公記」には寛永十年の記録はないはずである。

#### 四、公家達と元宜

山脇元宜と公家達との関わりは密接であった。先ず西洞院時慶との関わりは『時慶卿記』に見られる。同記は鴻山文庫蔵本と京都総合資料館蔵本とに就いた。すなわち、寛永六年に集中しているが、『源氏物語』や小刀、ミカンの貸借にまで及んでいる。次に『資勝卿記』では日野資勝との関わりが、寛永九年二月十四日と同十一年九月十八日に見られる椿の接木、同十一年十一月十六日の小刀、同じ箇所と同十一年九月二十日の歌仙絵・小袖、同十四年十月八日の尾張焼茶碗、同年十月二十日の占い、同二十八日には鮭の簀巻と言ったように、資勝とのやりとり、奉仕が目につく（以上、後掲資料参看）。そして、『尚閑公記』では近衛尚閑とやはり正保二年十一月三十日の条に「狂言和泉所望之源氏鈴虫之巻廿枚書之」、同年十二月二日の条に「狂言師和泉源氏鈴虫之巻今日書之畢」と『源氏物語』の贈呈があり、同三年十二月二十八日には「自泉涌寺巻数来筆五本和泉持参也」とあって、元宜が使い走りをしてることがわかる。そして、尚閑が近衛家の中でもとりわけ芸能好きだったようだと言及、和氏より御教示頂いているのであるが、芸能好きであった以上に、正保三年二月二十九日の条に「狂言師和泉子息五郎左衛門、去廿二

日死去之由夜前聞之間今朝為弔遣人」とあるように、元宜の子息元永の死に当たっては、早速お悔みに人を遣わしている箇所を始めとして、並々ならぬつき合いの仕方をしているのである。私は同年十一月二十五日の条に「狂言和泉来之作。其後大酒及夜半之時分事了」とあるのまで、我子を失いうち萎れていた元宜が久し振りに訪れたので、その元宜を慰めようとしている尚閑の姿すら思った。狂言師のお伽の衆としての役割、つまり堂上公家を慰める為の狂言と、又、狂言以外で奉仕する何でも屋、便利屋の存在であったとも指摘出来るかも知れないが、それは奉仕する者と奉仕される者との形式的な関わりであったと言うだけでなく、何かこれら日記に元宜と公家達との人間的な温かい交流を読みとってみた。こういうつき合いが果たして元宜個人のものか、それとも狂言師の役割であったのかは今後の課題としたい。

#### おわりに

以上、和泉流初代元宜について調査し得たところを摘記しておく。和泉流初代山脇元宜は京都六条に住み、寛永八年に石見守、同十四年に和泉守を受領した。彼と都の公家、日野資勝・西洞院時慶・近衛尚閑達との関わりは深かった。なお、それ以前からの大蔵流

との関わりを考慮する必要があるかもしれないし、又、和泉流についての公家関係を重点とする諸資料の整理が課題となろう。

# △附記▽

『資勝卿記』の中で「六条ノ者」として出てくる元和八年と見出し得た資料の寛永九年以降に十年程の年次差がある。中世文学会における本稿礎稿の口頭発表の後に、田口和夫氏からは同記事は観客である資勝が山脇元宜を金春弥太郎の弟子と見誤った可能性や、これは虎明の時代に近いので、このような事実があったなら「わらんべ草」の中に和泉流は大蔵の弟子家という記事があるはずなので断定は出来ないとの御指摘を受けた。又、米倉利昭氏からは、当時、金春の名を借りて金春を名乗る者が大勢いたので取り扱いに注意するようにとの御忠言を頂戴した。いずれにしても傍証が必要とされるが、あえて、元のままに私見を提示した。

## 山脇元宜の記録

※略号については「資勝卿記」を(資勝)、伊達文庫蔵「古之御能組」を(古能)、「時慶卿記」を(時慶)、「尚嗣公記」を(尚嗣)とした。

※句読点を任意に付けた。

元和8	11・23	乙卯、晴、女御殿御申沙汰御能候て、早天参内、公家・門跡不殘参内也。大夫ハ、シフヤ・紀伊守・因幡守・與吉郎・太郎八、是ハ幼少ナル者也(中略)今度六條ノ者金春ヤ太郎弟子狂言師一人来仕候也、今日ハナコヲスル也。後朝ニアサウ・尼・サタ	(資勝)
寛永2	2・13	甲斐中納言様へ御客御能。△夷見沙門▽弥右エ門・弥太郎・五郎左エ門	(古能)
2・27		名護屋中納言様へ御客御能翌日。△三番三▽山脇五郎左衛門△幕方角▽弥太郎・五郎左衛門・佐左エ門△若市▽極之丞・五郎左エ門各々	(古能)
寛永6	7・5	狂言ノ五郎左衛門来対面。被遣盃。明石巻ハ返遣。	(時慶)
10・21		山ワキ五郎左衛門ヨリ小刀一持参候。	(時慶)
10・22		山脇五郎左衛門へ礼ニ遣人。	(時慶)
11・24		山脇五郎左衛門ヨリ蜜柑籠一送。備後守返事也。	(時慶)
寛永8	11・4	堀川中将殿三位勅許。又、狂言師山脇五郎左衛門石見守受領勅許。	(資勝)
同年		七十石 山脇五郎左衛門	
寛永9	2・14	(「一分限帳」・「謡曲界」昭和六年十月号)	
		六條狂言師石見守参候間則対面申候。椿接上可申由	

寛永 10 8	9 15	寛永 14	12 10	9 20	9 18	9 14	寛永 11	11 16	寛永 10 10	10 1
狂言師石見參候。尾張ヤキノ茶碗ニ持參申候。則對面申、盃ヲ給させ申候也。石見ハ尾張大納言殿内衆指相候付て、和泉と名替仕度申候。残事ハ勸修寺中納言候也。	天晴。乙亥、梵堂來。正竹、狂言石見來。申之剋斗退出。 (尚嗣)	狂言師石見參候。尾張ヤキノ茶碗ニ持參申候。則對面申、盃ヲ給させ申候也。石見ハ尾張大納言殿内衆指相候付て、和泉と名替仕度申候。残事ハ勸修寺中納言候也。	為延壽院年忌、当院之衆設小斎。午刻、赴八條殿。折節狂言石見五郎兵衛父子來。一番見之。御説書前有晚炊。日暮故也。 (「鹿苑日録」七十)	狂言師ノ石見、木エ椿接候てクレ申候也。 (資勝)	狂言師山脇石見守申候色紙ニ枚、又、哥仙ノ絵ノ左右ニ哥、消書ニ枚出来申候間持退候。又、ノシメノ小袖一ツ退申候也。 (資勝)	狂言師ノ石見、木エ椿接候てクレ申候也。 (資勝)	日出以前始リ候也。翁・弥三郎、三番三・五郎左衛門石見ハ寿命經劔ヲ持テ出、二色ノ徳ヲ申候て合舞ニ舞候也。 (資勝)	六条ノ狂言師石見、政常ノ小刀一本持參申候。又、歌仙二枚、又、歌仙ノ色紙ニ枚消書頼申候。則、對面申して盃を給させ申候也。 (資勝)	國母様へ伺公。(中略)次御拍子、渋谷・紀伊守・對馬守仕也。狂言七条石見ヲヤニ仕候也。高砂・東北・立田・盛久・養老五番也。宝クラヘ・ウツヲノコツチ・カウヤク祢リ・昆布ウリ・人マ子等也。 (資勝)	也。
10 28	10 20			10 18		10 16			10 10	

之由也。予申候ハ、先、仙洞國母様へ内々申入候て可然由申聞候。仙洞へハ高倉を頼可申候也。國母様ニテハ天野豊前殿を頼可申由申候也。  
(資勝)

狂言師石見參て和泉二名替之議、昨日、天野豊前へ申候へハ心得申候。權中納言殿へ可申由也。又、高倉三位殿へ參申候へハ、御番にて、則、右之段ニ申候へハ晚可申入候。明朝返事聞ニ可參由之間、則、只今參候へハ、内々御心得候間、面向可申入由之由申候也。勸修寺披露ニ候間、江戸より上洛次第、口宜之議、相調可申由候へハ、先年之口宜、持參可申由申聞候。  
(資勝)

仙洞(中略)渋谷、紀伊守父子伺出申。狂言師ハ六条石見參候。高砂・狂言末広かりニ東北・清水・盛久・トン太郎・蟻通・伊勢參・養老・其後諷有。狂言舞石見仕候。  
(資勝)

狂言師石見守、寛永八年後十月——口宜案持參候間、則、主水に様子申候て、勸修寺中納言殿へ持參候へハ御心得候由也。和泉守ニ改申由也。(中略)其後、長橋殿より石見參て、御番衆は御前より御出入故、御殿ノカナ物失申候間、無出入様ニとの議候間、則、其通堅可申渡由御返事申候也。  
(資勝)

長橋殿より立入、石見御使にて、此比日出日入ニ赤候間、大法之御修法可被仰付候間、板倉防州へ該合可仕由被仰出候。  
(資勝)

禁中ヨリ鯉ノ簀巻二尺拜領。立入、石見御使ニ持參候。則、長橋殿御局にて御礼ニ伺書申候。  
(資勝)